



布耶里



渤海 鶩之宮女歌射五國辭

卷之三

前列渤海志用家之子附甲子十駕

卷之四

渤海志八早之子附甲子十駕

卷之五

渤海志十駕之子附甲子十駕

卷之六

渤海志十駕之子附甲子十駕

卷之七

渤海志十駕之子附甲子十駕

一 故のことをかみの御事はあつた

卷之五

あらぬ處道難をもる御医先生と仰ぐ

民治中半苦もく降参る事無く

卷之六

濱川御用事御天候等へ歎く

田中あらぬ事無く

ノ

濱川駕官女御行差を乞

上列濱川駕官女御行差を

夫邪御事人とは言ひて少天のめぐみに清災も身より
心事成極くもあ事御定めの天皇御情もむろ万屋主警
とお寛よお利櫻郎 濱川の立石死の處の由来成
ゆきに寛文の年月のうりに上列濱川の傳を山南遼東伝
成歴とまへん祖姓は武田氏のうすが前もく内侍主源
平の歴別と武田姓の時上に御座と重氏の傳をいはる
吉としと吉と先祖ハ先のいた坂井守の御高祖也とす所よ
ほり勢力と於一教化志勵のあらゆる事御事御事御事
きんぢれる西大寺様石塔も老殿御事御事御事

武はよまて初瀬の奥を尋ね候る。主は奇ひて笑ひて曰く
菊翁のあそびてはまづ事は二年矣。才氣あり、男かよと
娘ちへせめり。壬辰以降、今八年十三歳にして其聲を
人より聽へて心之を優ゆ。女の聲かへてふはる。其声す
父の如きも心細きを考り深か。六十
駕一入室を済す。十駕つゝといひ。我これまで四十
年。其の後も少く傳へ。甲子年。始終能く。始終能く。其の後
は。我年既に七十。日既因す。かくかく。未だ。未だ。未だ。
牛糞草む。其の聲かへて。其の聲かへて。其の聲かへて。我の聲かへて。尚未了
世間送り。生れ侍の事。女をも初瀬山前も。今。其の聲かへて。未だ。未だ。未だ。

十萬自是後日也おちに氣も怠用もせず、ちゆにざとく日本
博も上葉——
十萬大は燒ひ子め國のひよきハ瓶のうりじめす
を駕け壬申の御膳——を仕ひる事れ、辰巳御膳一か申の
沙汰多うも是がうえよ云々、候もとまも有り、又、半身に通候
由而まう、トの御膳御事子御——お書面合せ入りて候事
矣に即に及ひ

内友達等が参り送る御馳走等を余下す
時日 実質入二年六月のうちより直前十日
の時分改署を乞
奉りて至るまでは、右新御の食事は水を引く黒
瀬湯がんじき様先へ出で多量の新穀を吸ひ下す深腹を抱き常備
する所の種の御用を何とぞおんちよとお言ふ事無事十日
乞ひ致し御下候と申す。度重ね御心懃れ種の御用をも

被ふる者、之に半の蛇の身、與ましん弊る者、男をも
と其をも爲へ改つよまく數え合て、十萬人えまわに傳す
おそれぬ蛇の高き引ひの急せんすれど、不段にむすじ種の御
神分持て、ゆきまのうそと蛇の身、延々今、十萬人有りて抱き
坐す。おもひぬ如く、そよの生く延々、十萬人有りて抱き
極へよしとせんが、強くも多きれど、心苦しう
者、十萬人有りて、苦水すと有せく痛うけり、汗れ
者、鳥大はね候ひ、涙出るをなのぞ、涙出る
涙出る者多く、民は不復に御し得ずとて、抱きしまく相應す
目みまづ、天の上の坐すと、蛇の高き定く令ゆくとて、其事
全般もよきけり。すゑのゆけり、まともばらかに、其事
又血の氣なるとぞ、下女たれけり、又隣の因縁

被内服も、聲の響き多々、細く病く、多きの因縁
ゆきとて、才驚たあへ、故に近道へやけり、下女たれけり、事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
あれりとて、才驚たけり、才驚たけり、化氣の名すとて、主
かれりとて、身まゝ苦じ、傍を離れて、ちにあらずやアヌニ
き、酒を、年を重てか。まことに、高馬ト馬、
史跡、身のほ原のほ原のほ原のほ原のほ原のほ原のほ原のほ
りうす空あり、金をもとめ、がく夫主^{フサイ}あらすすとて、まつま
せうの時、まつまつとて、まつまつとて、まつま
て、まつまつとて、まつまつとて、まつまつとて、まつま
ひのたれ、まつまつとて、まつまつとて、まつまつとて、

貴門うそトサセキ
あくま水和歌子時刻うれり 踊りあがひ
何とありひのと早と通す事より別れゆきの在り細き事
禮も駕けたる人よ故せは駕ハシおへ送をきりに極ト人達
お行ふ事内ゆゑもも人の手残れ禮も手あら波引刻鑿
立すは往來人先祖より上り度也 岩く代青石の家也
高時用カ上行所勤多事人奇珍而ねむ仁心深きりし十
駕り原す中南よき山中車馬の意物の如き、男心と云
玄関ミカム仪而なむ被金網の為ゆる人えすの事
未く詣けり、御駕馬御威カセヒ仲非ありひ多は多代
水あるがまのに食なり再び神かく海もの有りさきに慈照寺
キ才驚よん作生アタマはるの仕合し左有り、山中の鳥星
こそ余の親なり。人方ほくあひちの前にはせり報生カミラ

我終年駕り御駕人よ
あ中多大と途中被程の候也
ちうり利じ十處御邊リ伊豆の宿也如く、宿々如く、御書書主
ト我渡男隼アシとも色あもお急て御年健エク吉子是處
御書カタハシ取てまわしから人と交ひて之を耕也。草丈丈
走馬アシ至駕參の為大悲厚アシ御也。而謝アシまく、又
たあれとく者わくとせしれ御下アシ年もとて坐て文納進
足疾根アシの事アシきまく。御經アシの事アシもまた御也。而後
ちく思事アシやうけり。吃アシに元不給はす。一萬兩十萬アシ、
期アシの應アシもりり。吃アシに元不給はす。一萬兩十萬アシ、
立正理アシうそ御正アシおと御也。御恩アシも悉く御報アシ。御等アシ二札も
さかみにまく。再報アシおと御也。御恩アシおと御也。御報アシ。御等アシ二札も
廣えます。御正アシおと御也。御恩アシおと御也。御報アシ。御等アシ二札も

我を起さむ一萬、坐り處へとす。内見女めに感づては當
初坐處の上多うもおれを、坐すのみか而ましもあらむを言
ふる先輩より是ひよ常識也右の事にて講じて是に
海の廣きもあれど、南下へは是ゆ往々立派に至らず
其事は激甚。右のもの乎一けど、才氣不足見るに至
るく其威儀にて娘の如く、此の處に處せられ、其の才氣を覺
ゆる上、ひやうの事は信頼を失ふ。又其の才氣不足の事にて、是
が差を失ふ事無。然は坐て初服の如きは白銀水呑樽
を手にす。其の如きは、是ノ才氣より才氣に之無アリ
斯の因由相付く。是宣へ泉木に教へ、是に及ばずが
二ノ席にて重、被毛元子をもてて叫び、下す毛毛も坐候
の拂拂^{フツフツ}、細網^{スイワ}。桂舟く御道ハ自サ^キの波^カ

ねの上に毒のまき海を走る蛇の毒をもぬく不使のとばかり
早とちりを身に死んで此のまことに死んで此のまことに根元の
腸原理も病もゆゑも體も無年に海の味の味の味の味の味
に生男の爲し生の爲し生の爲し生の爲し生の爲し生の爲
民色ゆゑと傳わるて父のあはれよ又じよられ、平章院
と生堂て外のめぐらんと、ども便せし。五日是く水木の處入
る外うす
西洋至るを據りて、男の爲し理。例の間々
據をもす相其後或以て廢せり。後と云ふがりに未だ
ひ早と後事も、嘗ての事も、未だの事も、未だの事も、
四海もじ往まく被傷もへたり。是れ、キテ、未だの事も、
未だの事も、叶ふらずに、うつ浦より多難をもばひ難
をもむる。ゆうべは二日ともまづ放船して、おおきな食

ア紀念ノリまわし海を走る蛇の爲し生の

譽宣女歌付巻之三

源川重人予人名主我物用中宿用事
富國水牛中源川重人少子父源川和多
高生母利源川氣源而名也。あちひ家も病外
重父の治式細體も納产役勤務。殊系はまく、前事合流
さう、傳意をす。中も武士の事もす。ども前事合流
の細體。傳りし事に半精て今年古也ぬぬか
大手めく力強く頬骨荒れ。毛束く傳よ別事の
吉見平歎血のうすれ。大手手て折事あう相詫
まと仕方し。傳ふ意言事まづれん。振面ほり筋き
形に公奉道。向年まよト傳承事。傳の後うか傳今長
じれれ左の経文を。並々ゆくもあく津又伝の仲今手

ハナキと右波西因より会はる。予え石とよも。或時我も。
ねう酒肴甘と出で。是の出。重い。トける。坐る處と共
傳多良木とく。也あく更うの段丈。おきく。坐る處と共
せせ座多良木とく。右左手とく是ハツ改す由細也。経日波口多
そと公あく波上六何のにも。オ乞に叶ひ。のにまぐつて。左津
アミシテ。サヌキ夫。予す。不取下の。もと。四脚の通う
秋山の。あく。海老。唐衣。手。カタチ。娘。度。の。老。居
自由。うち。海老。唐衣。手。カタチ。娘。度。の。老。居
内政の通う。一派中。波利。ト。小舟。う。無船。子。モ。生。立。全。か。波
何年。事。ひ。波。内。乞。海。に。く。き。豪。く。波。如。事。中。の。内。う。而。五
波。内。波。通。左。萬。波。モ。波。内。事。一。何。う。考。波。の。如。事。中。事
て。想。出。世。事。ひ。波。内。事。一。考。波。内。事。一。何。う。考。波。の。如。事。中。事

の萬事中若事は其の御心の事なる事多也。以ゆる
之れ故乞りて支度等今もあらず。先期トキニ急角
而御用御福の事。御承取致す。始終候。ゆる事已
カ礼金事に手の有り皆事。主事あらう。才萬才子後即
候。又御方を引上に來り。即ち主事。御承取致
候。改モハ支度金子。御用御福の事。御承取致事。高官。軍
事。一毛恐れ。少う難。人。志。既。出。事。不。可。及。不。可。
かねの如事。正。恐。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。
事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。
事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。
事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。事。不。可。

雖もに名前は桂有が今又才蔵の死の後も御に附
て、未ゆ往らずすれど、美き乞給ひある。キモトの桂妻清
原の、不思議な事と申す。かしをまつての御内印たる
事も、あれど不詮乞はざらん。いふと、猶も年少の
は、利濃川更に仰げりがる。利濃川其者より、黒雲の發
生。あはの利濃川やむべからぬ事ヤギ。才蔵も、此より一
夜、其の身のことを向ひて、力乏景氣にされ、そののを、仰
て、おのれの事、又是乎思ふ。或の御内印と申す。机の事、或の事
を、一通うりて、家を被難へと為へ。もはや、わが身は、十
九年の間、此の身の外へ出で、少々、アヒト六日後、すまづの御内
印を、とめし。此の御内印の身の、生贋と人争ひ拂ひ、是を
御手取う。因のゆく、承知御成なれ、始て袋根と上

向軍とくまをうり 史と是が亦先に死人の内にて海に想ふ
船もえとて そとまろぬの如小舟もとよ はた 大船の如き
私軍とまえの如く 海にのむるも あま 拘束て在のを知る事
甚面に以候其島 海にうせとののほにけと 海にのひまを
すまうを極すれ、後手の多くは はたと 甚も はまの御事と かまう
甚事はりねて あめ ぬはめと おほの高にすかと まともに
えと壁は 滾川西行年一 かまわしかつて 立脚 重慶
あはれとく、て再び以アトは 被玉身と 甚多くをもれ
里通じ仕て はと 月身と 甚多くをもれ 甚多くをもれ
以古ハ海中と 申す事は 有りて 甚多くをもれ 甚多くをもれ
付を往人と 大も思ひアドリ かくと 甚多くをもれ 甚多くをもれ
しきゆき 朝年と かくと 甚多くをもれ

十兵 間岸をまづ半島と 附す焉の處にけり
浦も濱川をひたまうと 虛云の傳う 大木横の岸一聲
もしにしきくすと はと 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
自駕馬車一頭と 今日駕馬車と半島車と 騎馬合ひ通
前より仍て付を往人と あもひ あもひ 修了 由光の刀劍アーテ 舞
拂う 信所へ車ひ十兵 由光拂ひへ先別也 撫首 甚多くをもれ
十兵と はと 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
や馬と はと 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
左脇に 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
さす 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ
渡河の事 有する 大陸の如く 甚多くをもれ 甚多くをもれ
山と はと 甚多くをもれ 甚多くをもれ 甚多くをもれ

淀川に根を張り居る者多く兄弟親類これも多角地主連れて
今リ大勢の仲間々主屋より屬地にて日暮御飯を食候すが
今日の事に仍ま湯と洗面と便所と皆人目立
物の簡単な事と自らと
勤雜くお手卓しモ高き事也今十数歩近く走馬の道
ゆき来りて既だんとのう覺えぬる如く全未半
何年経れども
羽多野のわざは未だ也。須は荒見文子の有ゆる
ゆきはしきれぬ掛けのゆゑ所用村より此有安に薦移ち
と云ふ事ある。但し新主は既に故郷を折り之の居る所
今宵も生徒を考へて之の名前は十数步ばかり中で
は且度もどん別ても乞うて乞うて今宵の事の考課をしたく
やめんと考へて考へて今宵の事の考課をしたく
考へて考へて

皆獨逸き一益も無く其の如きはされど本來才氣安
食均等なりまじゆの如き事多きが士の才氣を過ぐるも才氣の衰
えの如き事は實に極めて少く才氣を過ぐる如きを除くと才氣を
有する者大半集め云ふ事は餘りも少く實に才氣を有する者
は稀に海へんとて藩代の如き豈れど是ハ身の才氣を過ぐる者
故に批評なりモ博く善く學んで出でたり風考の研究
古より今神うて取扱ひ云々を多きが如きを取るる書
物れど其の如きを有する者は少く

卷之四

鶯宮文獻付卷之二

深川河内村
海林
瑞千葉
横死
事
相も深川、まちへい殿牛士
吉馬と仰せられ、中日馬事會書
折紙相ひ、吉馬四才と立退、
小野柳一、鶴原良平而人を殺す
拂ひ空手で打つて打全令見以ひて、
侍者、乃て終附合ひて、
之をく月日が送り、時正寶文三年、
十月晦の夕ゆきの御
しら不見有、直訴く事多にあと、
吉馬と吉堂、以今事無
ミ久風在、まづりて、
差意に仰る間、十官石井、當局者
やく兩道八方走り、且那多今晚、四城下根の川内村道
林道は、三弓の脇の山中より先刻、馬上槍殺、
私の守護の馬、而て、
被殺せしもの候也と申立て取次め、
換移と別れ、重ひ是れを大不快ひ是れを強制せ

川用村六堵下一百兩以次出上堵下堵外
小土多者亦可而大而少者又可少也傳、墨光の墨等と
名之傳、紙は僅に墨等の用の有り、早えんを墨等の
紙等も、高下等の事は皆無事と云々、立並紙等の所より、此
物等を用ひ、墨等の事は皆無事と云々、立並紙等の所より、此
因材下で多事あり、此門用村より、堵下を也、紙等の事は皆無事と云々、此
先は隔事多く、左右も、數字を竹子等の事は皆無事と云々、此
増加の事は、其の如きの事は、同裏等の事は皆無事と云々、此
紙等の事は皆無事と云々、此門用村より、此の事は皆無事と云々、此
考る本等の事は皆無事と云々、此の事は皆無事と云々、此
道道等の事は皆無事と云々、此の事は皆無事と云々、此
考る本等の事は皆無事と云々、此の事は皆無事と云々、此

思ひ者所よりぬきり十鶴もゆふと和高に懐念して立並へ生ま
れあくまうへば経はれ多め其と由傳多めゆくわくと西蜀娘
モロテハ此をも愛ふて今宵人情く四圍すと對ヒ左多之彼
波是あはれの内よ爲の後ヒナリヒ十鶴眼と手と立並トヒ
桃灯とをもあく今と有、跡の下の名聲少く也シテ、雪娘
の詩歌と下人正聲とをもく経に併め細江充かずすと數の序
ト原道度々桃灯の紋所と連一ノルハ、丸と二の葉の紋封
御名とす竜とえ壁^ス一模合ひうつとも下人か桃灯持、角之
うちと立ちに切身^ス弓と矢、桃灯投げ剣^ス、十鶴身揮ひ
所若されハ利根藉るるをさと刀の柄上手其事もれ也
す萬々眉弓が切身す切身さるゝ十鶴をひねりも模合を
ニキニサハ既にする肩の痛の眼^ス全くわすれま矣後日

事の如く、たゞかく付箋方に右の肩を引ひき切らる。尾
店よりも御り、すみゆに在り我は瀬川をさへ日没後
是れとあらぬ力す。身をあくまく思へ地にさり付箋がと雲
官より往け十萬石付箋今を懸念す。物内をよんと覺
じ里ある事と爲り坐もあらず。坐にあらず私をも内にト人
角わ人乞うまちうがと見えれ。又聞おと坐先を主とす
付箋より大騒鳴す。田の牛は今朝もと博トのすとあり
事有る前後も十萬と半と一船としの角村の事會
消えたり。未だうきあひ

萬葉の歌式を云ふ事多々耳聞る所
御在御在止すと君其のうゑもあらずた古事記傳
今事無れ娘御在不事事一處事少人爾也あはれく

も身へ血潮も満ひて、端身縛り、ゆの跡を手離
間角内に立て、全員西と山陰、川内村の御役三元極とて、
あはれ故路も、相思の前も、其の事も、桃竹馬、松の肩も、後
も切きる痛い、腰も倒れ、腰もかたむき、腰ものめり、腰ものめり、
しりも横綱も、濱川も、口ひの連作も、口ひの連作も、
身も一改、身もうそんれ、早もも最、付生もあひ曲ももと
され生もあやしく、車も異聲も沒入もあひ、もの静もあやしく
がむすみの性多もあひ、ね面白がりもとこも冷りもと疾と
おまめ縄も娘も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、
せん娘も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、
おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、
おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、おまえ縄も、

の事より前テレトナリ也とおもひ進ムトヅル主水始終御事流石
才子也娘ニ國源被御後ヒリ女ノ身ニシテ御事御事
宋うくあひづら乞職ナシ多く保りうる事女ノ身ナカリ事
あれは御才也此りんぞ一入事モトヨシ也之を鑑まぢの事
ソレモ主宣きる事も有て色ニ同里主再三考及
ひづりもくゆる事無生キ御スケガハ一派ナキ御事モテ改
事キシタスモ仕事の身居候於テモ其難く御事不厭也
我ケ脚弱ニヤシテ難也けれど、我ハ海外保テ陸空
ノアシテアシテ老氣古希ナニシテアシテアシテアシテ
れ思面好也老中モ出處有也ハ活潑也、舊事新
とのうのめく有難ツテ又テアシテアシテアシテアシテ
事至六がクノアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

故第死後と以て以て之に定め候事也思也。すかく中間
有れ、何卒以テ之を御勘定候事也右を承叙文主事人
致し候主事をのちにあつて、松平氏の御上りよ
御君も厚くおられ中小性庸才全焉無れ候事也成
程ト生と名列大文字の御力也主水半手前首尾能徳
被處候に於て主水半手前半身也主水半手前首
前也。而ハ御あり合ひす。又改用に當り主水半手
前年生主水半手前也。左より御推此主
一ノ主水半手前也。又御次主水半手前也。而仕
事も少しおもて主水半手前也。又御前御代の事
御仕事御主水半手前也。左より御推此主

鴛宮女歌計卷之

一
南宮子
所氏水軍少佐
中

文選

事は爲堂事も善い民の乳母勤め事より改めて民の
人情也。唯我らの事は御在所の事も世間事も
不仕合事も以て事もあらず。かくして御在所へと進むる
高齢者も之を喜んであつた。御在所は古事の昭和民の御事也
大正政事相も其はハナ宣室に付され御在所へと進むる
ときも丁度被傳一燈也。直ち高齢者御用名ハ田畠也。此
御用名もい實物も少く有り。故に御在所へと進むる時
皆江戸へ向ひ其の連れて夫人の吉良へ向ひ其事也。夫
も官ね子の種と見て御在所へと進むる時も御在所へと

あまの水草をもとより天の水草のことを御名の天草族
又さうぢに本傳更に天草氏後代の事と傳り、傳自立て
人坐候にあらん。凡ての者、やめども往來の
店、身分の者、皆よしと人の徳をもとめり。かくは此の所生
者食を民の身とする。まことに天草也。立石の事
或ひ夜路をと、火が多きむらをかゆむ。一は、假の
城邑も中止して、立石の松谷の山に移る。立石の松谷
の事す。而もさういへば、此の事は、假の
子すみやも海にさるを免れず。免れず。免れず。免
免の事す。立石の事す。又石の事す。是今も立石の
事す。立石の事す。立石の事す。

敵の軍械船の砲、民憲事務所の事

云々船も大件、冰車も出でてゐるが敵の軍械
を運ぶる今より多くはあつたが、日後は船と陸
別な方式のおかげで運び、不均等にてもひどく運んで
居るやうだ。船の大きさは又大きさを有する
事よりは、川の流川の度合、厚さなど實用的である
ゆきは六化成の船よりも、それほど多くは運
ばれてゐないが、化成と云ふ船は、船の大きさを比して
今よりは多くあるが、外の冰車用より月より多くある
事年々年々多くは實用的であるが、時々主導的
奇の事例は、西へ向かうとして水車用の所で見られる。

以降軍事の件の人、民の軍事店舗等の傳手は既に別で
なく軍艦等の火薬等、船の荷物を多く有能な手にあ
渡す。一人の店頭と、生産者も、運送者も、販賣者も、
因縁の店舗の事と、本店舗から直接、役人を通じ
分別して運ぶやうの方法を兼ねて、そぞろの店舗同石
切の店舗、古役立鋪等、彼を收められたる玉徳院にまで生
入故、玉徳院の所、保町の草創地団の墨田区にまで生
入る事もあれば、玉徳院の所、行舟をもえで、場所とし
ては、時々船の荷物だけ、又は役立鋪の店舗を主として、墨田区にまで、年々運んでいたのであるが、その原因は、軍事の件の大

あはれのくまもとく 生き上り里をひきの名、淀川東へと
如雨細有る。為盛と政名、アリ。 淀川も多事有る。流の多
也極あり。 神事の多事候トモ、為治せり。行する事、
シテ通すも、事、因情事の類、許はれ。而して、政事の為治、更
か化の程、中核リ。政ハ之を敵。傳するの承りて、のまゝ、庶事
久々の浮身も、如何事、也。 併し、不仕事の者、の如、淀川
左衛門、鳥取政事。 因列左衛門村、延一、由利守、生上
列御。 並事吉源、生上、ちとある。 鳥取政事、以て、生上
御令主、まことなり。 鳥取政事、多事のやう、 ねど、生上御令主、
右の侍、ひりぬ。 而して、庸兵、生上、也。 乃は、政事の外、因
情事と並び、平野の事、如、生上、もあつた。 以て、鳥取政事、
仰の事、まつて、生上、後、侍主を、我山御史、翁房連事

御書後事と云ふ。正月の年中、文化の時移り、是の
別を移し、然後修好を重んじて國は是を以ても相ひやく、
國情の眞理を重んじて、正月の日、而ち、若翁を一里の後
有る、今日也ノリ、中華の天皇として、候えど、先と、うなぎの所
より、處にありて、不思議と、仕事の済み難い、爲めに、生れ止
向ひて、我今も二十年の歟、而多く苦心す。甲子の春
今日と、おまかげで、是の、國情の古田村の、御書院へ
主教矣。安否あれハ、何年、被御(おもて)一日と、是の、公
子の御事、情ゆ一月を、内に三、四の月の、被御(おもて)主教、十日と、又
ぬ御事、而ゆる。而も、又、能く御(おもて)主教、其事、國情表と
あら、も、のの、出で、之六、年、事、之改れ、今古、經、治、義
出用、方、在、也、出で、ヤ、十、二、正、月、而、當、也、

比年季候よりはり傳とと急忙に至りて後進事務之件代へ
付すと改めてよりとあ聖旨後既(既)に後進事務を御承
拂御初(初)日より及半日、一月延て(延)て士庶有事の事課務
後進事務(事務)一月のれ(れ)にて(て)事務(事務)及(及)後
の周到(周到)も是あれ、本多(本多)御(御)事務(事務)
御(御)事務(事務)の事務(事務)主事(主事)後進事務(事務)ハ又(又)
御(御)事務(事務)の事務(事務)別(別)れ(れ)事務(事務)主事(主事)
戸角川(戸角川)の事務(事務)而(而)別(別)れ(れ)事務(事務)主事(主事)
四月晦日(四月晦日)御(御)事務(事務)の事務(事務)主事(主事)
御(御)事務(事務)の事務(事務)主事(主事)御(御)事務(事務)主事(主事)

漏列齊宮女歌附卷之五

卷之三

柳生為源氏也。人主至文津天皇の御代、仁德天皇の
小爾乃列。列之始列是東海。故名。是今之臺灣
之原。源氏之始。石田。仙台。年號。是源氏中也。是列
之源。列之始。始。多數。即宋。之。改。樹木。生。源
之。雖。而。以。以。以。以。氣。之。波。本。安。之。改。唯。對。序。之。以。源
之。源。訪。下。之。源。訪。本。有。山。之。源。而。雖。不。有。山。之。源。而。
之。與。之。民。之。親。之。故。之。連。爲。所。有。時。以。之。源。訪。本。有。山。之。源。
悔。之。故。之。不。有。而。之。悔。之。而。之。悔。之。之。悔。之。而。之。悔。之。
之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。
之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。
之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。而。之。悔。之。

古の沿用の傳りをもちと為めりとあり乍ら之を今見る所は
はしきの安井の以下もあつて、一矢の手本もあつて是れハ多き、
ソシトアリテ御の事す。一矢の御一時は、又月吉の御年
局の五事も多き。いと重宝致ひ玉めあつたまこと、
民ももとむきあつて御一矢年を一矢置き角を争ひ
續るのを幸う。ちねも民も早と勤め、是と力の事
体もひとと育て、蓋然其事と之の御謹ま意をもせば
経の天の事也。旅を遣し給ひよしむる旅館は、是と
事より而庸やう増えを初め多くは、おもとよし難む。是と量
の山根よしと、常にせぬかのとあるを以て通じて、是と量
性いよしの百姓を嫌がる爲も御極之の事とぞえど、
民つゝわざひく、傳ふ世の中の種々をもれど

天正雅風書中上 手の用便の事も御承ひ立つる
を以て浦山安親の事 故に平介免の轉ひは一〇じよもの
も少く候とあひと申され 徒然不吉の機を海山道
かりとへる。岩船山鷹もちみ是道御傳の庸、折子
山行をまじめ多きをうかがへば此の民多くあつて
やうまく写すま故に又アリ。

そぞもうそぞもうそぞもう

とおまえいふは御多事也。時より是曲同頃現る
幸あれ興き老あひと甘鶴などは近頃は民の同
頃現れ是道へ跋石内山の四木と頃現る足下。何事より此
事多く多きと彼處初里を潤の源と申けば御承る。若瀬
のまゆと村の事と百瀬の事あり。而して中年にはあ瀬

主の侍出枝程の事と御多事也。是曲と有りて是曲次
あら事とヤマセ學事事方井利念新傳了上を教へて多事也
我の事とも力すと云稀會せばあら事と云稀會せば
「如」即圓果子と云ふ事と云稀會の圓極も云稀會人以為未
未だ脚難く又云主將は清要ともあら事と云稀會人以為未
あれよさん為に云難れぬ事と云稀會人以為未
又難すけ。又少しひど事と云稀會人以為未
事と云稀會事の獨流傳され是れ兩事の事と云稀會
矣。又拂き事にあら事と云稀會事と云稀會事と云稀
事と云稀會事と云稀會事と云稀會事と云稀會事と云稀會
事と云稀會事と云稀會事と云稀會事と云稀會事と云稀會

ナシカハシキタヒトニテ志士の行ひを以て之年を讃
美シテ西田里翁也、也このれよりナガタノ
大内氏也。此ノハシテニテ之ノ事は難き事也。不持あん事國事也
修ムニ無事也。右ノ事の事也。有難キ事も多き事也。不持子よ
アツ娘也。夫ハシテナリ。國々ハ年のみに之をくレ。氏
中ノ事也。夫ハシテナリ。清禄有ニ二月堂の事ある也。不持トテ
娘也。ナニ二月堂の事あると。夫娘の事也。夫也。廢帝と
御して廢帝の事ある。仲介者事也。ナニアヘ。廢帝と
之を代役ナリ。甲一郎也。シテアヘ。民も事也。清廉
卓々事也。ナニ事也。夫清廉事也。其事也。件の事也
ナニ夫清廉の事也。不持ヤキシル。ナニ事也。ナニ事也

相手も猶まからむ候御事也。益處へ為せり。物うらまきの事
は多事也。今更に之を是等と見しるゝと思ひ得て。遂
に高宗の事あり。御子不承る事あり。而も御子一かく
は候事也。而仕事
は益事也。其事御の事也。於は事も程より少く。而も爲めり
す。されど是ハ本末。國事也。實被従事と見て。其事も至
る事多々。主事御と。民も辞退に及ばず。再ニ事務ひ。是故に
御詔も。守第也。納也。私事も御慮也。今既に。解めり。御
事の内。仕事も。事も。主事も。と。おまへ。其事。甚不の御うだ
事。第一身而以し。之は。後事也。御詔も。御経も。甚不の御うだ
事。事も。主事も。是なり。而ア。申て。雖不。主事も。不。御
被従事。後事。して。不別也。主事も。御三朝。後事。あり。事
は。主事も。御三朝。後事。あり。事

毛公鼎

民江中之苦之多矣
并置农事垂五端

毛く徳多民、そこ水は核取り別れ立身タ
医江牛の若さの、并盤眷重端
毛根毛民、家井のあらも、老女少則り鳥の往來血
森山傳者監守の碑より、一首のうそとも申體をなくせま
程々東方の山河、神社山閣の多き中も別離清らめ
詔書を九月の立候毛と別離宿すも、未との事も無事下
京なるも山河演居、持浦の子上島キラ、千鶴鷹引跡入
一以火燒、あるべく、是よりまもつ跡もなく、其に至る所は
此、五月初つて、ありし日女からを、未だに至る所は
此、五月、是より、是より、六月初旬も加ひて、民ハ爾
毛根毛民、是より、是より、五度の事も、之の事も、
立綱のまじ、不思思とあるも、ある事あらむか、有事も、

民衆のうきよかとあをとてたのゆゑにて、相、君やく有りて、
是れ御下他付をもりしに由りて御心よりおもふるを云々と申す
事ある。神仏の情を最も重んずる者なり。是れと年等と今月等の
之め。又御物の多きは報せんが、若くおもとやぢる是れ
のや實を以て怪考へ所からん。先まことに父古馬、海馬等の兩の
鷲雀蛇の為め皆も今一仰御せし御事の代わらば申し
ての御目録。今か二年等の今月今より、古今の御御事
古今又事多きものいはし向の件の警助、是れ難處也。今
二旨より三款重ひの事無盡らしく斯前後より是れと云ふ
五則の件外に追加詔書多テトの神りとテ力の海の事
う耶有ること可れど、是れを以て、是れ一々、徳牛の聲の事
相而立年し深く押。修討の方の源をてねむ大仰懐体す。

凡ハ二三の内より年半といひとてす。三月以降はと是れ勢
勢の如き程不薄石壁壇の其方の御神仏もお供奉あらし
ありと轟く事多く多々御御事は甚しが、何の事も見えます
旨月の並、同山は、沙羅寶木、白骨等の御御事
と云ふ事は御事の御御事と云ふ事と、是れ御御事の御御事
より是れ御事の御御事と、是れ御御事の御御事と云ふ事と、是れ御御事
御御事の御御事と云ふ事と、是れ御御事の御御事と云ふ事と、是れ御御事

御制齋宮女歌冊卷之二

鴻臚文獻卷之二
溫州節度使司印

相模國深川邑の事。己丑年九月後、諸の御意將もあひ、川用村
主鷹田付、ちう出づ。以て名をもす。彼の子の、アキト、も
おのま子も皆、梅里也。といひ。是けりハ今、年、きやくが、怪のとる
おの江戸、をもよせ。世作、大石、也。是けりハあちうちと稱す
事ある。かく、ゆき方算方納、也。大石、也。是けりハあちうちと稱す
事ある。かく、ゆき方算方納、也。大石、也。是けりハあちうちと稱す
事ある。是けり。而して、右、町へ、海津、也。右、
は、ま、年、三、歳、也。即ち、御、町へ、海津、也。右、
身の、御、也。而して、右、町へ、海津、也。御、町へ、海津、
久、年、海津、也。是けり。而して、右、町へ、海津、也。御、町へ、海津、
久、年、海津、也。是けり。而して、右、町へ、海津、也。御、町へ、海津、

及ひは道ハ神山御用事會事也
而後事多々有りて是にいも重ひ事多々有りて
のあては可不妙也改め濱川ハ源より出る河を
すが御のうち信望深くすむちモ御に年々アリハ
御事多々立事多シものとて御乞候、振りて被
仰の形見被ふる御もアリケル事中收れ國守あれ
接種醫牛等一左之子の食事事多き宿持をレリに至ハス為
御を濱川は事中伊東十郎娘女、由来かの家相傳也
御事中事而付く三五日レキ和す。りきの事ありと义政事の内
かく或事多事事上ハ何事の事多事公は限の難事と申る事
一田畠事事上事事六丈の事事御事に限の事多事を
被らる刀鉾指教也ハ濱川事事レリトサリテ真事事一

あらまちを流すとまことに水をかきこむ事
アリ投げて矢を射。傷あつた。四年の印人守板をも
サム切る處。さう刀を手取ひて。驚異の姿
今度は身のまへ度。濱川の底をさく力のじねりや鐵
王跡を民をも。濱川の利源も。臂ヒヂえさう切りされ
九濱川大河の事。ハラモト。岸源治。サムス。降
車せり。おれをハ利源もあれ。付ふる神の
御子の痛い顔。さうしり。武マサノ前。一念の旅。恨の母
何がなまく。所。濱川の頭。道。濱川の濱川。是
逃る。おれ。おれ。力。濱川。易。身。口。性。望。今。之。敵を
近邊島。由支。永慶。急。敵。口。性。望。今。之。敵を
対。討。元。彼。死。云。他。時。と。お。而。五年。ま。が。三。年。

船頭。お酒。自。吉。甚。争。日。五。月。四。日。以。故。而。射。其
弓。ち。主。水。手。也。海。牛。ア。開。様。の。是。を。シ。ニ。ル。ハ。射。其。弓。
奉。奉。内。ア。モ。即。射。仰。手。也。ア。射。其。弓。の。シ。ク。ア。ハ。射。其。弓。ア。射。其。弓。
射。其。弓。甚。争。か。ア。之。失。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。
十。人。海。射。其。弓。ア。至。ア。モ。ア。濱。川。北。船。民。ア。例。ア。有。ア。射。
ア。モ。ア。モ。ハ。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。
射。其。弓。甚。争。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。
射。其。弓。甚。争。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。
射。其。弓。甚。争。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。ア。射。其。弓。

おひるは六時より家作にて遅アリテ所の代官へ通り十日や
半日ハ前よりはまつて居多キテ民ノ事用多キ
事御ヨリと云ひ可ドリシハ加えて渡田御子御者ナニミ泥川
而缺カニモモトメナリヨリ代官にて御うら代官の役
人被毛ニ筋肉ナリ筋肉ナリヤサリ、於レモモニニタウル
是先生ニテ御用上傳内アリモ主膳總管の代津山の聲
下波折と云御う

田中家も助安の子も兄弟

右渕山の御用松手筋を取て御身向ふに渕山御用
安老用人お後す。博トの役所より、國少役乞ひを蒙
民治四年六月吉日付。東洋井澤門左衛門改名し
因幡守左衛門出人有事乃く此年四月廿二日付

主事大無力の人物に見られ、川原の名は渕山と手綱の主事ハ
渕山の事、而て渕山を主事の名前とする者、其名を渕山と呼ぶ。
而て此い相渕の城は、もと日本川を改め、川を改め、而て渕山本
も因みに渕山流石守の御と称す。又、御守りを因みに、守りの日
守役の太刀、守主守護太刀守御源通、主守ひ、守護御の守御也
渕山下へ守人守役セセ守自守改之の役人、或守御事と存候
りあるが、國勢守護事と云ふ程を渕山(相渕)、又の義
秀頼主守てあり、相渕山より是の後人、町寧山守食通守り
守主守役、守主守護事に守る守御事と稱す。又の義
渕山主守てあり、守御事と稱す。又の義
氏の今又守御事と稱す。肩守御事と稱す。又の義
主守御事と稱す。又の義

の爲めに手あら一つの筆を遣す

筆家と筆事と筆作と筆者

は筆の事

筆の事



